

# Heroldo de HEL

N-ro37      decembro, 1990

## 北海道エスペラント連盟

068 岩見沢市1条東6丁目 法然寺気付

ORGANO DE

HOKKAJDA ESPERANTO-LIGO:

Iwamizawa-si, Itizyô, higasi-6-tyôme,  
Hônenzi-kizuke, 068 Japanio

## 1990年北海道を振り返って

馬場 恵美子

今年もあと数日を残して終わろうとしている。今の時期各地でザメンホフ祭の準備に取りかかり忙しい毎日となっている人もいらしゃるであろう。今年にはHELにとってどんな年だったのだろうか。

まず5月3日～5日滝野自然公園にて合宿。(25名参加)うち道外からは2名参加。Heroldo de HELはこの号を含め4回発行。北海道大会は29日～30日苫小牧にて開催。(不在を含め63名参加)大会中イラン人ジャーナリスト、モハムマド・レザ・ケイルカー氏による講演も行われ、イラクのクエート侵攻以来イスラム世界ががぜん注目を浴びる中貴重なものとなった。

個人的なものでは世界大会(キューバ)に3名。サンフランシスコ夏季講習に2名。日本大会(横浜)に不在を含め27名。フリスカ(琵琶湖)に1名。北海道の仲間が参加している。

2年後には北海道エスペラント連盟創立60周年にあたり、一つの節目に来ている。広い北海道の中で一人一人の力をつなぎあわせて、道を築いて行けば「冬の時代」もそれほど厳しいものではないだろう。力の結束を!

### ★札幌エスペラント会主催ザメンホフ祭★

日時:12月15日(土)

午後3時~8時まで(会場使用は1時~9時)

場所:札幌市職員会館、アカシア

地下鉄西18丁目駅 ☎(011)621-0156

会費:2,000円(夕食付)

内容:バザー、SESの歌、ザメンホフについて

各大会参加報告

\*手持ちの歌集を持参してください。

\*今年もバザーを行います。見の回りの不要品を値札を付けてお持ちください。貴重な資金になりますのでよろしくお願ひします。

### ★札幌エスペラント会総会★

日時:1月26日(土) 午後3時~4時30分まで

場所:札幌市職員会館、アカシア

会費:無料

当日札エス会の年会費受付を致します。

会員形態により金額が異なりますので詳しい内容については阿部さんまで

内容:会計報告ほか

\*当日1時半~3時までは普通どうり勉強会を行います。時間に余裕のある方はどうぞご参加ください。

\*年末は12月22日まで 新年は1月12日から勉強会を行います。

第54回北海道大会（苫小牧、9/29-30）に 前年をうわまわる63名が参加

苫小牧での北海道エスペラント大会の開催は78年の第42回大会いらい12年ぶり、札幌を離れての開催は79年の小樽大会いらいであった。過去12年のあいだ、札幌エスペラント会以外のロンドが北海道大会を招致することはなかった。それは、ある意味で北海道でのエスペラント運動の、とりわけ地域ロンドの力量の反映であり、同時に連盟の普及活動、組織活動の脆弱化の結果でもあった。

しかし、札幌だけが北海道のエスペラント運動を代表しているわけではない。苫小牧エスペラント会は国際的的市民交流、市民のなかへのエスペラント普及活動において、連盟のなかでつねに牽引的役割を果たしてきたロンドのひとつである。今年の北海道大会は、その苫小牧エスペラント会の周到な準備によって開催された。

大会には実参加36名、不在参加27名、あわせて63名が参加した。当初、札幌以外での大会開催には、参加者数について悲観的な見通しがあったのは事実である（当初は実参加20名で、のちには30名で資料・記念品を用意し、大会当日あわてて不在参加家族の袋の回収したほどである）。昨年札幌での大会（実参加45名、不在参加12名）にくらべると、実参加では少ないが、全道、全国からの友情あふれる不在参加応援によって第54回北海道エスペラント大会は昨年の大会の規模をうわまわることができた。

北海道エスペラント連盟はここに、大会参加のみなさんと、大会に寄せられた全道、全国からの物心の支援に心から感謝するとともに、大会で示された北海道のエスペラント運動の希望に満ちたエネルギーを全道いたるところで全面開花させることをよびかけるものである。

上げ潮にのって、連盟創立60周年の年—1992年をむかえる準備を始めよう！

Vivu Esperanto!

Ni fosu nian sulkon, estonto estas nia!

（北海道エスペラント連盟委員会）

★第54回北海道エスペラント大会の記録

苫小牧エスペラント会の招致によって11年ぶりに札幌を離れた今年の北海道大会は、苫小牧市サイクリングセンター（第1日）と苫小牧市民会館（第2日）を会場に全道、全国から昨年の札幌大会をうわまわる63名が参加（不在参加27名を含む）して成功裡に開催された。

この大会には日本滞在中のイランの samideano Mohammado-REZA Kheir-Khah が北海道連盟の招待で参加して、エスペランティストの大会の名にはじない国際的な大会となった。また、北海道のエスペラント運動の先駆者から若手の活動家、道外からの参加によって、大会はこれまでの運動の到達点を確認し、さらなる展望を切りひらくものとなった。

今大会開催の重責を担った苫小牧エスペラント会にあらためて敬意を表するものである。

第1日

大会初日は前夜行事。会場は青少年向けのスポーツ施設・苫小牧市立サイクリングセンター。苫小牧エスペラント会によって格安、快適な会場が用意されていた。その会場一番乗りは函館の佐々木将人で、次は緑星旗をひるがえした乗用車、バイクに乗った札幌組だった。地元の星田淳、佐々木、阿部映子、カワハラ・カズヤ、後藤丈二、佐藤英治、富田美奈子、馬場恵美子の手で午後2時には受付、図書販売がセットされた。

午後3時の受付開始の前から会場の2階和室にはなつかしい顔、遠来の顔が見られ、あちこちで談話の輪がつくられていた。なかでも、s-ano REZA のまわりには室蘭の須藤昭三、苫小牧の柴田真吾、大山口誠がとりかこみ、話はつきない。大会組織委員長でもある柴田はその間にも会場のすみずみに気を配り、大山口とテーブル、座布団、

座椅子をならべるなど、ひとまかせにはしない。苦小牧の星田文子、影浦泰子、札幌の渡辺康子、山岸悦子、末永章子、常呂の横島君枝も s-ro REZA とのあいさつもそこそこに会場づくりに。

そのあいだにも東京のヤマサキ・セイコー（日本エスペラント学会理事長）、川崎の西泰宏（同理事・組織部長）、札幌の児玉広夫らが続々と到着して、人の輪も大きくなっていった。

会場の和室には連盟顧問・木村喜壬治の筆による“La 54-a Hokajdo-Kongreso de Esperanto”の横幕と苦小牧エス会、室蘭エス会の緑星旗がかざられた。

夕食（1階食堂）のあと、午後7時から佐々木の司会で懇親会が始まった。出席の25人の自己紹介のあと、函館の岩井正久が今年の夏、小学生の長女をつれてハンガリーの文通仲間を訪問した際のビデオを紹介した。一般のハンガリー家庭内で写された映像は出席者の関心をひいた。岩井の旅談のあとは自由に歓談が続いた。例年だと歌や余興もとびだすところが、今年は青少年のための施設が会場であったせいか比較的静かな懇親会となった。

もっとも懇親会「第二部」は Reza、ヤマサキ、岩見沢の渡辺晋道、苦小牧、札幌の女性も交えて深夜まで話がはずみ、エスペラント論にとどまらず、カナ文字・ローマ字にいたるまで幅広く論じられた。事前に予告されていた恒例の Substela Paradizo は「隣の市営墓地でやるというけど、あそこは熊が出るぞ」という amikaj konsiloj があり、今年は断念した。来年については改めて考えたい。

## 第2日

第2日は苦小牧市民会館に会場を移した。前日の会場・宿泊所からは全員が乗用車に

分乗して移動した。会場には、第1日目には参加できなかった江口音吉（小樽）、木村喜壬治（札幌）、新田為男（由仁）の3顧問が元気な姿を見せ、また切替英雄（鳥取）もこの朝、鳥取から千歳に到着してすぐに会場にかけつけた。

、苦小牧エス会の8月の公民館まつりでの展示物

が壁に掲示され、前日の図書販売も移動してきた。今大会の図書販売は SAT-ana Grupo en Sapporo のメンバーが売子となって2日間で約79,000円の売上げがあった。会場の会議室、ロビーでは旧交をあたためあう姿、遠来の仲間と話こむ姿がみられる。入口には前日同様、阿部、馬場らが陣取り、地元の柴田、星田、影浦らが開会の最終準備に走る。その間にも参加者が到着し、不在参加家族に渡されていた記念品が回収されるという「うれしい誤算」が生じた。

午前10時11分。影浦泰子（苦小牧）の司会で開会、8歳の柴田真太郎（苦小牧）が“Mi malfermas la kvindek kvaran Kongreson de Esperantistoj en Hokajdo.”と開会を宣言した。“La Espero”斉唱のあと、大会議長団にカワハラ・カズヤ（札幌）、横島君枝（常呂）を選出して議事に移った。

柴田真吾大会組織委員長（苦小牧）、星田淳北海道エスペラント連盟委員長のあいさつのあと、イランから参加の M-Reza Kheir Khah が、「北海道を訪れ、思いもかけぬ親切にあい感謝している。この大会に出席できてうれしく思う」とあいさつすると、会場は大きな拍手で包まれた。

ヤマサキ・セイコーは J E I（日本エスペラント学会）の名であいさつした。そのなかで、この大会に参加した理由のひとつとして、近年、北海道連盟の働き手、活動から強い印象を受けていることを具体的にあげ、「エスペラント運動成功の基礎は総じて lokaj grupoj にある。北海道の運動の発展を願う」と激励するとともに「J E I の会費はけっして安くはないがエスペラント運動の健全な発展のためには強固な財政的基盤を作ることが必要」と強調し、J E I への入会をよびかけた。

西泰宏は「J E I の組織部長になってから、ほとんどの地方大会に出席するようにしているが、去年は北海道のことをすっかり忘れていて参加できなかった」（笑）「それぞれの大会には違ったいい雰囲気があり、ここでもそれを感じている」とあいさつした。

以上3人からのあいさつのと苦小牧エス会、札幌エス会から活動報告があった。

苦小牧(星田淳)：例会はこれまでどおり月3回、公民館でおこなっている。昨年10月、中国から訪問者があり歓迎会をもったり、白老などに案内した。毎年8月の公民館まつりでは多くの文化サークルが参加するが、苦小牧エス会も手紙や世界大会の写真を展示した。その一部はこの会場に掲示してある。苦小牧での活動は大きく進んでいるわけではないが、根気よく継続している。

札幌(児玉広夫)：札幌の会は北海道では一番大きいと紹介されたが、運動としては弱い。入門講座は春秋2回開催し、春は6人が受講して最終的には一人しか残らなかった。秋はまもなく開講するが、講師が若手の矢田真里子に代って雰囲気も変わるだろう。例会は毎週土曜日、市職員会館で前半は高橋要一が、後半は木村喜任治が講師をつとめている。最近では出席者が減っているのは残念である。その他にクリスチャンセンターでは“Karlo”の講読会もおこなわれている。最近、カナダから訪問者があり歓迎会をひらいた、これには20人が出席した。ザメンホフ祭は毎回盛大で、新しい人たちが堂々と話したり、朗読したりで楽しみな会合になっている。

ここで、議長団からこの時点での参加者数が発表された。参加者は不在参加を含め58名となり、前年の参加者57名をこえ、大会は成功のうちにすすんでいる。全参加者が拍手でこれを確認した。

各地からの参加者からのあいさつが続いた。

切替英雄(鳥取)：私は「客」ではなく会員だ(笑、拍手)。昨年秋、鳥取に引越して、すぐに鳥取大学医学部にふるくからのエスペランチストを知った。忙しいので十分な時間はとれないが、二人の間にはエスペラントをとおして厚い友情がある。また香川エス会会長がドイツ語の教授として毎週、鳥大に来ているので定期的に会っている。夏、研究のためカナダ、アメリカに行ったとき、オタワとワシントンでエスペランチストに会え、

ワシントンでは4人で小宴会をもてた。

江口音吉(小樽)：最近は多くの大会には出席できないので不在参加することになっている。私の妻は57年前に小樽のザメンホフ祭に出席していたエスペラントを学んでいないが、きょう57年ぶりに妻も出席している(拍手)。妻がそうだったのは悪いことではない、そのあいだ家庭を支えてくれていたから私がエスペラントのことで活動できたからだ(拍手)。

新田為男(由仁)：第二次世界大戦敗北の直後は北海道だけでなく、日本、世界でエスペラントが隆盛をきわめた。由仁町でも岡本義雄、今官之助と私が役場や保健所で何回も入門講習をひらいてエスペランチストを送り出していった。そのころは講座があると学校の教室から希望者があふれるほどだった。戦後まもなく北大中央講堂での全道ザメンホフ祭では全参加者の三分の二が由仁からだった。残念なことに、その若い人たちは仕事をもとめ札幌、苦小牧などに行ってしまう、今はだれも残っていない。ここにいる児玉広夫君も町を去っていった(笑)。わたしは1934-35年、本郷元町にあったJ E Iで岡本好次から指導をうけた。La Revuo Orientaによると北海道のJ E I会員は50人、広い北海道にわずか50人。札幌だけでもエスペランチストは50人以上いるのだから、もっとJ E Iに入会しよう。UEAのデレギートに登録して外国からの訪問者を迎えよう。

北畠 隆(苦小牧)：市役所の労組幹部の依頼による訪中団のことで1年ほど中国のエスペランチストと交渉してきた。まもなく13名の団員と約10日間、中国を訪問する。昨年はシャンハイのエスペランチストを家でもてなし、今年も京都に留学している中国の友人の息子を招待することになっている。

須藤昭三(室蘭)：簡潔に報告する。4年前亡くなった平田岩雄の蔵書は先日、市立図書館に寄贈され、蔵書整理はすべて終了した。平田夫人から今大会にあいさつをことづかってきた(拍手)。

大会によせられたメッセージが議長団によって

紹介された。

今年、J E I 50年会員の表彰を受けた桜居甚吉（岩内）は、エスペラント運動へのいっそうの情熱を表明し、大会の成功を期待した。来年の第78回日本エスペラント大会組織委員会（大阪）は北海道の運動の発展と今大会成功の期待をのべるとともに日本大会への協力、参加をよびかけた。

つづいて岩井正久（函館）、木村喜壬治（札幌）横島若枝（常呂）、宮沢直人（札幌）、岩崎泰夫（恵庭）、伊藤直樹（札幌）、前田幸一（小樽）が各地での活動、近況を報告した。

宮沢は、昨年6月に結成され、北海道連盟に団体加盟した札幌の SAT (Sennacieca Asocio Tutmonda) グループが青年労働者、高校生、環境保護運動のなかで活発な普及活動を続けて、会員を倍加し、なお複数の小講習を継続させていることを報告するとともに、国労や韓国青年労働者の闘争を世界に知らせた機関誌 FRONTE の反響を紹介し、エスペラントによる国際連帯をよびかけた。

各地方会、個人からの活動報告、あいさつを終えて、馬場恵美子委員が連盟の1年間の活動を簡潔に報告した。機関誌、合宿、大会が連盟の活動の三本柱である。合宿は25名の参加で成果があった。来年度もこの三つを軸に活動をすすめてゆく。連盟創立60周年を2年後に控え、委員会では記念事業について討議が開始されているが、この報告では具体的な提案をしなかった。

連盟会計報告は阿部映子委員（兼会計委員）が健全な財政状況を報告したが、会員増によるいっそうの財政基盤の確立がもとめられた。

提案・討議事項は、今年の大会で札幌の木村喜壬治から文書で提案された「北海道エスペラント大会のエスペラント表記改正の件」のみであった。木村提案は連盟規約第5条の大会名称 Kongreso de Esperantistoj en Hokkajdo を道外、外国からの参加がある実状にあわせ、Hokkajdo-Kongreso de Esperanto にあらためよ、というものである。

木村の提案理由説明にたいし、佐々木将人（函館）から固有名詞の形容詞化の疑問点が指摘され、この場での決定は時期早尚であるとの反対論があった。日本エスペラント大会の名称についても同様の意見があることから、日本大会常置委員でもある西泰宏（川崎）にも見解をもとめた。この問題では、ヤマサキ・セイコー（東京）、Reza（イラン）、星田淳（苫小牧）、切替英雄（鳥取）が発言したが、最終的には今大会では採択せず、今後1年間機関誌上での研究、討論を積み重ねる結論にたっした。

次回大会は札幌で開催することを決定したあと、連盟役員改選に移った。

前期委員会を代表して馬場委員から新役員の推薦があり、全員を拍手で選任した。また、議長団から顧問も紹介された。

#### 91年度 北海道エスペラント連盟委員会

星田淳（委員長・苫小牧）、渡辺晋道（事務局長・岩見沢）、阿部映子（会計委員兼務・札幌）岩井正久（函館）、カワハラ・カズヤ（札幌）、児玉広夫（札幌）、須藤昭三（室蘭）、浜田国貞（新得）、馬場恵美子（編集長・札幌）、横島若枝（常呂）。

以上全員再任

#### 北海道エスペラント連盟顧問

江口音吉（小樽）、木村喜壬治（札幌）  
新田為男（由仁）、吉原正八郎（札幌）

議事終了に先立ち、この1年間に物故された会員・永田明子（オランダ）に黙祷を捧げ、故人の冥福をいのった。

議長団解任のあと、柴田真吾大会組織委員長のあいさつがあり、全参加者が拍手で苫小牧エス会奮闘に感謝し、北海道でのエスペラント運動の前進をちかいあった。議事の終了は午後12時20分。

午後からは Reza の講演『イランの生活と文化』が一般市民にも公開しておこなわれた。

\*\*\*\*\*

敬称略。2日目は録音の翻訳（要点）で、文責は記録作成者のカワハラ・カズヤにある。

北海道エスぺラント連盟90年度会計報告

1989年10月9日~1990年9月28日(単位;円)

**収入の部** **1,088,766**

越越金	610,175
連盟会費(過年度分)	2,000
連盟会費(90年度)	76,000
連盟会費(91年度)	30,000
連盟会費(92年度以降)	6,000
Ainaj Jukaroj販売	36,660
合宿剰余金	54,871
54回大会参加費	218,000
54回大会寄付金	54,500
銀行利息	60

**支出の部** **345,312**

事務局事務費	50,000
HEROLDO編集費	100,000
役員活動費(5名分)	15,000
雑誌購読料(La Movadoなど3誌)	11,200
振込手数料	392
54回大会会場費	4,300
54回大会記念品(絵はがき)	9,300
54回大会諸経費	155,120

**残高** **743,454**

大会寄付内訳(敬称略)

14,500円	佐藤みはる 布美子 奈美子(3名ほど)
10,000円	ヤマサキ セイコ
5,000円	小林貴美子
4,000円	柴田智美、豊蔵正吾
3,000円	江口音吉、木村喜任治、横島君枝
2,500円	山岸悦子
2,000円	菊島和子、西尾務

1,000円以下 桜居甚吉、馬場恵美子

計15名54,500円

お酒 中里和夫、柴田真吾

ご協力ありがとうございました。

90北海道エスぺラント合宿会計報告

1990年5月3日~5日 参加者25名、不在3名(単位;円)

**収入の部** **154,499**

参加費	113,200
寄付	33,470
物品売上(図書,Tシャツ)	7,529

**支出の部** **99,628**

宿泊費	58,820
車代(3名)	7,500
写真	2,272
事務費	236
通信費	15,330
雑費(懇談会)	15,470

**残高** **54,871**

\*北海道エスぺラント連盟へ繰入

寄付内訳(敬称略)

10,000円	切替英雄
7,970円	菊島さん歓迎会
4,000円	伊藤智幸、菊島和子
2,000円	児玉広夫、中村栄治、山岸悦子、
1,000円以下	横島君枝、義村政見
菊島さんよりバッジ・シールの提供がありました。	
ご協力ありがとうございました。	

第54回北海道エスペラント大会参加者

【参加】阿部映子、伊藤直樹、岩井正久、  
岩崎泰夫、江口音吉、江口八千代、大山口誠、  
影浦泰子、金森美子、カワハラカズヤ、北島瞳  
木村喜壬治、切替英雄、児玉広夫、後藤丈次、  
佐々木将人、佐藤栄治、柴田智、柴田真吾、  
柴田真太郎、末永章子、須藤昭三、富田美奈子

西康広、新田為男、馬場恵美子、星田淳  
星田文子、前田幸一、宮沢直人、山岸悦子  
ヤマサキセイコ、横島君枝、渡辺晋道、  
渡辺康子、モハムド・レザ・ケイルカ

【不在参加】梅木孝昭、影浦英明、河原慶子  
河原トキオ、河原ミラノ、菊島和子、小西岳  
小西ちよ、小林貴美子、坂下正幸、桜井甚吉  
佐藤憲、佐藤奈美子、佐藤晴美、佐藤弘子  
佐藤布美子、佐藤みはる、柴田智美、瀬川綾子  
留目昌子、豊蔵正吾、西尾務、牧敏弘、松本由  
水上侑子、宮岸忠孝、山口紀代美  
実参加36名 不在参加27名 計63名



KANSAJA LIGO DE ESPERANTO—GRUPOJ

Sone-higasi 1-11-46-204 (Kobori Mansion Toyonaka)

Toyonaka, Oosaka-hu 561, Japanio

Tel. 06-841-1928 poŝtkonto 60436 Oosaka

Al La 54-a Esperanto-  
Kongreso en Hokkai-dô

HOSIDA Atusi-kata  
Itoi 393-83, Tomakomai-si  
Hokkai-dô, 053 Japanio

de La organiza komitato por  
La 78-a Kongreso de Japanaj  
Esperantistoj

ĉe Kansaja Ligo de E-Grupoj  
Sone-higasi 1-11-46-204  
Toyonaka-si, Oosaka-hu  
561 Japanio

90.09.26 Oosaka

Karaj gesamideanoj en Hokkajdo,

Okaze de via 54-a kongreso, ni, laborantoj por la 78-a  
Kongreso de Japanaj Esperantistoj, sendas varman kaj elkoran  
saluton kaj samtempe deziras plenan sukceson de la kongreso.

Ni scias, ke via kongreso havas due longan historion el la  
japanaj regionaj kongresoj kaj des pli deziras ankoraŭ plu daŭran  
okazigon de la kongreso kaj samtempe aktivan movadon en via loko.

Nu, nia flanke, La 78-a Kongreso de Japanaj Esperantistoj  
okazos la 24-an kaj la 25-an en aŭgusto en 1991 en Urbo Suita kaj  
nun ni plej energie preparlaboras por la kongreso. Ni bonvenigas  
partoprenojn de plej multaj gesamideanoj ankaŭ el via loko al nia  
kongreso.

Kun elkoraj salutoj,

Via

NISIO Tutomu  
por la organiza komitato  
por la 78-a Kongreso de  
Esperantistoj en Japanio

## Plezure Amikiĝinta Kariba Kongreso (Raporto de la 75-a UK en Kubo)

YAMAGISI Etuko (Sapporo)

Kubo! Sendube Kubo!

Plene kaj sufiĉe mi ĝuis la 75-an Universalan Kongreson de Esperanto en Kubo, ĉirkaŭita de la kariba maro tre hela, ĉar mia parolkapablo pliboniĝis pli ol antaŭaj partoprenoj en UK-oj.

Ĝi okazis de la 14-a ĝis la 21-a julie. Post tridek horoj de ekflugo, ni finfine atingis sur la tero de kuba lando je la tria horo frumatene. Cetere, de meksika aerhaveno al la kuba portis nin helica aviadilo, kiu estis kvazaŭ rompiĝema kaj kiun japanaj karavananoj nomis "onboro-basu" (aĉa buso). Tuj post la alteriĝo ne tre facile ni surlandiĝis. Ĉe la pordo enireja unu kubano atendis nin kaj li diris al mi; "Ĉu vi estas japanino?" "Jes, saluton!" Mi kaj Segawa-san (s-ino SEGAWA Ayako) kun granda ĝojo manpremis kun li kaj mi parolis kun li esperante. Kial tiel glate elbuŝiĝis esperanto el mia buŝo? Tio estas por mi duobla ĝojo kaj la unua emocia sceno post mia alteriĝo al Kubo. Vi povas imagi tiun scenon, ĉu ne? Dum unu semajno li agrable helpis nin, tamen mian dankkarton li bone povis ricevi, ĉu jes aŭ ne? Mi iom maltrankviliĝis.

Ĉi-jare mi partoprenis en la UK, decidinte ke mi sufiĉe spertu la esperantujon, jes vere mi kontente "esperantujuliĝis" en Havano, kvankam la partoprenantoj estis iom malmultenombraj kompare kun aliaj lokoj. Oni diris ke la aliĝintoj estis ĉirkaŭ 1,600 el pli ol 50 landoj. La kongresejo estis tre granda konferencejo malproksima je dudek minutoj aŭtobuse de la centro de la urbo. Oni portis nin aŭtobuse de hotelo al la kongresejo, ĉirkaŭinte ses-sep hotelojn, matene je la 8.30 de nia hotelo kaj de la kongresejo je la 11.00 nokte. Ni sentis maloportunon. Post kvar-kvin tagoj oni iom plibonigis por la revena horo. Se ni veturis al la kongresejo, maltrafinte la buson, gardisto severe postulis montri al si nian kongresan nomkarton. Kaj en la kongresejo tie kaj ĉi tie ĉiam staris kelkaj gardistoj tra la kongreso.

La intekonatiĝa vespero okazis la 14-an en la salono de la kongresejo. Multaj tropikanaj fruktoj bele ornamitaj prepariĝis kaj elstaraj muzikistoj venis kaj ludis muzikojn. Segawa-san nomis ilin "Cuban Boys". La ĉeestantoj ĝojege ĝuis kubajn muzikojn kaj dancojn: lambada, rumba, mambo, ĉa-ĉa-ĉa, bolero k.t.p. Ĉiuj dancadis forjetante iliajn ŝuojn. Tre forta atmosfero regis tra la salono. Ĝi daŭris ĝis la noktomezo. Ĝi sendube estis Kubo!

La solena malfermo okazis en la 15-a, dimanĉe, kun neatendita honora ĉeesto de la prezidento Fidel Castro. La kongresanoj grandege ĝojis kaj aplaudis elkore bonvenigante lin. Ŝajne ankaŭ li ĝojis en la koro pri la okazo de la Universala Kongreso de Esperanto en Kubo, mi certas.

Ĉu Esperantisto estas tiel kuraĝa?

La sekvintan tagon mi provis ĉeesti en la konversacia kurso kaj en lernado de la hispana lingvo. En la konversacia kurso gvidantino faris unu familion kaj poste plimultigis familianojn, tiamaniere ŝi disetendis la konversacion. Ĝi estis tre utila kaj bona maniero kiu plaĉas al mi ege. Saman manieron mi jam spertis en la hokkajda kunloĝado ĉijara.

Mi ĝuis ankaŭ ekskurson al iu marbordo kie serene longa strando



daŭras kaj la sunbrilo estas tre forta, plie tre ripozebla loko. Tie mi reale sentis ke finfine mi staris ĉe la kariba maro. Segawa-san naĝis en "kariba maro" kaj mi promenadis kun iu juna blindulo man-en-mane. Mi pensis tiel ke ankaŭ li venis ĉi tien por sperti la kariban maron. Longe promenadis mi kune kun li sur la varmega strando, ofte enirante en la kariban akvon, eble ankaŭ li konis la kariban akvon, kvankam li tute ne povas vidi la akvon. Li estas kuraĝa homo. Post la kongreso li sekve partoprenis en la Internacia Junulara Kongreso en la sama lando.

Mi ne scias kiom da blinduloj partoprenis en ĉi UK krom li. Iun tagon mi ekiris al marekskurso kun tri blinduloj. Per ŝipo ni ĝuis krosadon sur la kariba maro proksimume du horojn. Iun profundan lokon la ŝipo ankris kaj ŝatuloj sinĵetis en la maron kaj eknagiis. Tiam, je mia miro, la tri blinduloj faris samon. Ŝajne, ili agrable ĝuis la kariban maron pli ol ni nenaĝintaj. Tio povas esti ne mirinda afero, tamen por mi, kiu neniam vidis tian aspekton, tio estis ege kortuŝa sceno, samtempe mian koron fresa zefiro trapasis karese. Mi pensis, ĉu Esperantisto estas tiel kuraĝa.

Alian tagon ni iris vidi cigarfabrikon. Ekstera aspekto de la fabriko montris tradicion grandiozecon - ĝi estus iama teatro - tamen en interno laborantoj vice faris cigaron mane, tute mane. De malfermitaj fenestroj venis agrabla vento en la ĉambron sen klimatizilo. Nur pendis unu aŭ du helicoj de la plafono. Preskaŭ ĉiuj estis negroj, ankaŭ submastro. Kiel vi scias, cigaro estas la fiera produktaĵo de Kubo. Oni severe kontrolas la kvaliton kaj laborforton.

Ankaŭ Hemingway iam vizitadis tien

Kubanaĵ partoprenantoj estis tiel multe, ŝajnas al mi ke kvarono de la kongresanoj estas kubanoj, kaj ili parolis tre bone, kvankam ili estas preskaŭ komencantoj. Ili afable klopodis por akcepti nin per koro anstataŭ aĵoj, tiele mi sentis kaj estis kontenta pro ilia amikeco.

Venis al mi bonega ŝanco, ke mi kaj Segawa-san promenadu en historie malnova kvartalo de Havano kune kun du junaj kubaj esperantistoj. Ricardo kaj Carlos estas studentoj servemaj kaj gajaj. En la vendredo ni havis nenian planon por fari, pro tio antaŭtagmeze ili, kun kiuj ni jam amikiĝis en la kongresejo la malferman tagon, proponis nin gvidi sur la strato ĉirkaŭita de vidindaĵoj. Kompreneble, scivolemaj ni jesis saltĝojante kaj ekiris kun ili, kvankam ni estis iom lacaj kaj ankaŭ tiu tago estis varmege. Unue, ili nin gvidis al la trinkejo "La Bodeguita de Medio" kien antaŭ longa tempo Majstro A. Hemingway amis viziti, kaj ili regalis nin per trinkaĵo Mojitos, kiun ankaŭ la majstro ŝatate trinkis tie. Ĝi estis tre bongusta kaj freŝa, sed ni iomete ebriiĝis, ĉar ĝi enhavas rumon. Ili invitis nin ankaŭ al fama - pri tiu fameco ni poste ekkonis, bedaŭrinde - restracio najbare staranta. Ili demandis, ĉu ni ne volas manĝi ion? Ni respondis: "Dankon. Sed ni ankoraŭ ne volas tagmanĝi." Kiam mi ekvidis la brakhorloĝon, ĝi montris la dekunuan. En la restracio multaj kubanoj gaje sidis manĝante kaj trinkante.

(daŭrigota)

\*\*\*\*\*

La red. aldonas superfluaĵon: S-ino YAMAGISI donis al la red. fotokopion de La Havana Kuriero, kongresgazeto de tiu UK, en kiu ni informiĝis, ke Fidel Castro adiaŭis al J. Wells, prezidanto de UEA, per jenaj vortoj: *"Mi konsideras min soldato de Esperanto."*

## 永年会員表彰

岩内町 桜居甚吉

この度ESP学会よりその設立70周年を祝して私に、永年会員としてHonorigoを贈られまして身に余る光栄と存じております。

顧みれば私がESPと出会ったのは大正9年(1919)でありました。そして翌年入会しました。大正10年(1920)東京神田・猿楽町のオンボロ日本ESP学会旧事務所を訪ね、ESP全集その他を分けて頂き、当時そこに机を並べていた小坂狷二さんの名札を見て帰りました。その後同氏のNHKラジオで全国放送された「エスペラント講座」は、忘れられないもので情熱あふれる音声や語り口が、今も耳底に残っております。

今回の受賞に際し欧州や中国を共に廻った当時理事長の磯部幸子さんや、死ね直前までESP普及に情熱を傾けられた評議員の山賀勇さん(私と同年生まれ)が近年ともに急逝せられ、この盛典に栄誉を受けられなかったのは誠に惜しまれるところであります。

このところESPは会話様式、会議設備の進歩・利用に押されて世界的にその利用価値が低迷しております。しかし、国際化が急激に進むうち異語民族間の交渉が緊要になる中で、大国が自国語を強制して世界制覇をしてきた永い歴史が消滅する時代となりやがてEAPが新の世界のINTERNACIA HEIP A LINGVOになる日が必ず来ると信じております。

最後にH. E. Lの御発展をお祈りします。

\*桜居さんは今年度日本大会(横浜)の中でエスペラント学会より永年会員の表彰を受けられました。益々のご活躍をお祈りいたします。\*

## EL MANJO

(1) 旅にあれど夜は燈火しをるわれを闇にや妹が恋ひつつあるらむ(羅への俄書・作)

Ĉe en vojago mi restas kun lamplumo, sed tamen al mi sopiras atendente ĉi en obskur en nuno. (koreio=新羅)

旅中ではあるけれど、夜は燈火をともしている私を、あの子は灯火もなく心も暗く恋の燈が灯っていることであらう。

(2) 稲搗げばかかふる吾が手を今夜もか殿の若子が取りて嘆かむ(よみ知らず)

Ankaŭ hodiaŭ vespere vi prigemas, ho sinjorido, pro miaj manoj kiuj pro pisto fendigemas.

稲を搗ぐのであかざれがされている私の手を、今夜は御殿の若衆が取り取って嘆くことであらうか。

(3) 葦の葉に夕霧立ちて鴨の音の寒し夕し汝をば思ばん(よみ知らず)

Ho, mi sopiras al vi, dum vespera nebul' surfalas foliojn kanajn, frostas kriad' sovaĝansera.

葦の葉に夕霧がかかって鴨の鳴き声が寒々とする夕は、お前のことを思ふことであらう。

(4) われのみや夜船は漕ぐと思へれば沖辺の舟に楫の音すなり(羅への俄書・作)

Dum kredi mi ke ni solaj sipon remas en tiu nokto, de maro malproksima pagajaj sonoj venas.

自分だけが夜船を漕いでいるのかと思っていると、沖の方に舟のおとがしている。

(5) 武庫の浦の入り江の渚鳥羽ぐくもる君を離れて恋に死ぬべし(よみ知らず)

For de l' amata vi, kara, sen trankvilo, kvazaŭ birdeto ĉe estuaro, preskaŭ mi morto spro sopiro.

武庫の浦の渚にいる鳥が、鳥の羽に包まれるように、大事に可愛がって下さったあなたの手はなれて私は鳥が死んでしまおう。(木村 喜彦治)

## Nia Trezoro Flugas tra la Mondo

Legu k legigu! Almenaŭ aĉetu....."Ainaj Jukaroj"-n!

ETNISMO (27.04.1990) favore recenzis nian eldonajon

Fine de novembro 1989 aperis la tria eldono de tiu ĉi 144-paĝa libro modele reliefiganta al internacia publiko minoritatan kulturon. Kio estas JUKARO? Unu el la preparintoj de la verko, Hoŝida Acuŝi, klarigas en sia artikolo "La gento aina, monoritato en Japanujo":

"Por rakonti pri la kondutoj kaj instruoj de /la/ dioj, /la ainoj/ verkis eposojn nomatajn Diaj Jukaroj (Kamuj-Jukar). La vorto "jukar" signifas "imiti", do en la pratempo, la rakontantoj en tranco imitis, ludis la kondutojn de dio, oni povas supozi. Troviĝas ankaŭ alia kategorio de jukaroj nomata Jukaroj de Herooj (Ojna Jukar)."

La ainoj estas la aŭtentikaj indiĝenoj de la plej norda insulego de Japanio, Hokajdo, kaj la iama "lando de la ainoj" -AJNUMOSIR- ampleksis krome la Kurilajn insulojn kaj Saĥalenon. De tie la plej multaj ainoj elmigris post 1945, kiam Sovetunio estis okupaciinta la tutan insularon. Ainoj nuntempe estas altgrade asimilitaj kaj nur malmulte ankoraŭ scipovas la originalan ainan lingvon. Depost 1987 tamen eĉ ekzistas radiokurso pri la aina lingvo. Ĉu do renaskiĝo? Espereble!

"Ainaj Jukaroj" prezentas 14 eposetojn kolektitajn fare de Ĉiri Jukie (1903-1922). Tiu ĉi aina junulino surpaperigis la jukarojn en latinaj literoj kaj aldonis la japanan tradukon, sed ŝi ne ĝisvivis la publikigon de tiu unika antologio de aŭtentika popolkulturo, kiu aperis en 1923.

La unua eldono en la Internacia Lingvo estis "simpla", sed jam tre valora: Ĝi estis "nur" tradukaĵo. Naŭ jarojn poste, en 1988, Hokkajda Esperanto-Ligo regalis la publikon per dua, ampleksigita eldono kaj nun per ties represo. La aldonoj - almenaŭ por ni etnistoj - estas same interesaj kiel la jukaroj mem: La kompilintoj-aŭtoroj ĉirkaŭ Hoŝida Acuŝi donas enkondukon en la ainan gramatikon, ekzemplon de jukaro en la originala kaj reviziita formoj, kun traduko, kaj vortareton por kompreni ĉiujn eĉ plej etajn elementojn aperantajn en la ekzempla jukaro "Pon Okikirmuj jajejukar 'Kutnisa kutun kutun'" (t.e. "Malgranda Okikirmuj pri si rakontis 'Kutnisa...'" ).

La jukarojn akompanas ĉarmaj desegnaĵoj faritaj de geknaboj elementlernejanaj de Kerimai, plano de aina domo kun akompanaĵoj, fotoj pri tradicia festo de ainoj, mapetoj de Japanio kaj Hokajdo kaj diversaj tekstetoj rilate la vekintinon kaj ŝiajn familianojn kaj amikojn.

La libro kostas mil japanajn enojn kaj ..... valoras ilin!

ujm

\*\*\*\*\*  
Rim. k provoko de la red. Supre metita recenzo pri "Ainaj Jukaroj" eldonita de Hokkajda Esperanto-Ligo estis reproduktita el "Etnismo/Informilo pri etnaj problemoj"(n-ro 47). La subskribo ujm signifas Uwe Joachim Moritz, eldonanto-redaktanto de la gazeto. Estas bedaŭre, ke ankoraŭ neniam aperas sur nia Heroldo recenzoj ellaboritaj de HEL-anoj mem. La red. invititas vin plenumi la taskon. Se vi okaze ne legas aŭ ne posedas.....tuj! Se ne, la trezoro de nia Ligo verŝos larmojn.

MESAĜO de Hokkajda Esperanto-Ligo  
al la Korea Esperanto-Kongreso 1990

Prezidanto de HEL ACUŜI HOŜIDA

*Hoŝida*

Karaj gesamideanoj en Korea Esperanto-Kongreso,  
Mi havas honoron saluti vin en la nomo de Hokkajda  
Esperanto-Ligo, la loka organizo en la plej norda  
insulo en Japanio, Hokkajdo. Pasis jam dekelkaj  
jaroj de kiam mi vidis S-ron SO Gils unuafoje en  
Seulo. Dum tiuj jaroj via landa movado estis  
unuigita. Kaj mi ĝojas vidi, ke li nun aktive  
laboras por nia afero kiel UEA-estrarano pri  
la azia movado. Kiel vi jam vidas, la tuta  
situacio postulas, ke ni esperantistoj devas  
aĝadi pli vigle trans limoj kaj muroj  
starantaj, falantaj kaj falintaj. Por tio pli da  
kunlaboro inter ni, najbarlandaj esperantistoj estas  
ja necesa.

Do ni, esperantistoj en Hokkajdo deziras, ke via  
kongreso havu grandan sukceson, kaj vivu la amikeco  
inter samideanoj de niaj landoj.  
Vivu Korea Esperanto-Kongreso! Vivu Esperanto!

Hokkajda Esperanto-Ligo

Seulo, 1990-11-5

Estimataj,

Ni, koreaj esperantistoj kore dankesprimas pro via gratulletero  
rilate al la 22-a Korea Esperanto-Kongreso, kiu okazis en la 20-21-a  
de Oktobro en Seulo, Koreio.

En tiu Kongreso partoprenis 260 gesamideanoj inkluzive 10 alilandaj  
geanikoj: Japanio, Irano, Finnlando, Nederlando.

Partoprenantoj firme konstatis, ke Esperanto estas unu el solvmanieroj  
por monpaco.

Dum Kongreso, estis diskutkunsido sub la temo "Unuigo de Koreio",  
Oratora konkurso, Kanta konkurso, Teatra konkurso kaj 10 fakkunsidoj.

Jen mi sendas Kongresan Libron por doni informon rilate al tiu  
Kongreso. Mi esperas, ke ĝi estu utila por kompreni Esperanto-movadon  
en Koreio.

Kun koraj respektoj kaj salutoj,

Sincere via,

CHANG Choong-si



Prez. de Korea Esperanto-Asocio

北海道連盟から隣国の韓国エ  
スペラント会に国内大会にむ  
けてメッセージを送ったとこ  
ろ韓国からkongresa libro  
(大会記念小冊子)と礼状が届  
きました。  
札幌からソウルへは定期直行  
便もあり、そう遠くない将来  
交流があるかも知れませんね。

## 読書ノートから

須藤 昭三

“La Alta Akvo” István Nemere 著  
(ハンガリー, 1985年刊, 129p. 1200円)

むかし、“湖底の故郷”(こていのふるさと)という題名の歌謡曲があったと記憶している。この小説を読んで思い出した。

技師 Valter、その妻 Izabella、支配人の女性秘書 Klara、最後までダム建設の用地で頑張り続ける人物 Peter。これだけが名前で出て来る登場人物である。

前任者のあとを受けて新しい任地に来たこの技師は、ほとんど出来上がったダム建設の用地から村人が完全に立ち去るのを確認するのが仕事(頭がよく、魅力的で、女性に手が速い)。

—君は町の近くの他の村に適当な家を買ったのかね? —今からじゃ家を売る人なんかいないよ、50<sup>キ</sup>離れたところでもね。人間どもは現在、少なく働いて多く欲しいと思っているんだ。今にここは湖だ、観光客がたくさんやって来る。ここの人たちにはお金がごっそり入るよ……ご覧なさいあなた、数年後には村人さえもヨットで湖面を走りますよ。その次はみんな車で走り回るさ。でも畑で働くのは誰でしょうね? それを誰も知っちゃいない。機械でしょう?

町へ引き揚げようとしている村人と技師との会話である。何か他の国のことでないような錯覚をする。ダム建設が原発でも火発でも新幹線でもゴルフ場でも飛行場でも置き換え

られるように思う。

“私は同意しないよ”。彼はついに言った。Valterはもう我慢できなかった。“何が同意できないんですか?”。彼は声高に叫んでいた。彼はなりふり構わなかった。“誰とあなたは話し合っているんですか? 今、誰と? 水とですか? ご自由になさい! 1週間後には木陰のこのテーブルさえも、あなた、見ることはないんですよ”。Peter は飲んだ。多分返事の代わりだろうか? Valterは少し待った。そして静かに続けた。

この小説は章で区切られていない。2行ほど空白を置いて場面が変わる。面白いのは軟の面で、支配人の女性秘書 KlaraとValterの関係である。結局は技師のこの性格がいやで妻 Izabella が黙って家を出ることになるのだが、訳せない部分は想像して下さるとよい。Klara は支配人の女性でもあるので見つかったら首が飛ぶのがValterの立場である。

—あの老支配人は我々のあいびきに気がついたかな? そんなことはあるまい。Klaraとは3回しか会ってないんだ、早すぎる……

Por momento liaj okuloj fariĝis kvazaŭ rentgenaj, li travidas ŝiajn vestojn, vidas la ruĝetan haŭton, la malhelajn pintojn de mamoj, la nigran triangulan arbareton ĉe la femuroj.....

“君はPeterを知っているのか?”。Valterは驚いた。そのPeterはIzabellaの車と一緒に立去るのである。

それにしても彼の目がレントゲンのようになった、というのはいいですね。

(室蘭エスペラント会)

## 日本大会に参加して

8月24日から26日まで横浜エスペラント会による第77回大会に参加しました。2年前札幌での大会で主催者を経験し(ところがお客さんの経験も一度もなかった)運営の難しさを味わった為か、日本で1・2と言われる組織力を持つ横浜ES会にかける期待は大きいものがありました。

1日目午後から横浜港見学か市内見学。私は後者を選び炎天下の中をひたすら歩きました。ひと月も外出しないと、地元の間人でも街の変わりかたに驚いてしまうという。それでもガイドブックには載らないようなちょっと楽しい話付きでなかなかのものでした。

その夜ゲ-テ座の横浜パフォーマンスでは朗読劇あり・踊りありと狭い会場ではあるがびっしり。ここで札幌のメンバーによる北海盆踊り。(後藤、サトウ、カワハラ、私)ニワカ次込みではあるが、この日のために深夜北海道大学構内で歌と踊りの練習までしたのです。法被に豆しぼりのてぬぐい。「さあ皆さん一緒に！」の声に踊りの輪ができました。うまくいったから良かったものの最初に客席から出てくださった人たちに感謝。そんな一人に荻部夫人が。どうも彼女は札幌出身のようです。

翌日からは、各分科会。プログラムがいくつもに並行しており、どれも参加したいようなものばかり。これが一部の参加者には不満らしくプログラムの組方が悪いという意見もでていました。

「限られた時間にいくつも」というのは無理があるのでしょうか・・・。そういっても毎年「この分科会に行けばダレソレに会える」と楽しみにしている人も多いはずで、解決するのは難しいようです。

おもしろかったのは、東京で世界大会があった当時を振り返るといふもの。参加者は少なかったものの、今は故人となった有名人たちのエピソード

にお腹を抱えて笑ってしまいました。

「旅の楽しみ」のテーマでパネラーを頼まれ出席してみれば、参加者はほとんどが海外旅行経験者でこちらの方が参考になるものがあったりして・・・。ただその席で、旅行に必要な物はお金でも暇でもなく、体力であり気力であり健康が何より大切とゆうことで意見が一致しました。

「女性の会」では「機関紙の編集を持ち回りにしてみれば」ということで年明け号は北海道編集となっていました。皆さんご協力宜しく!

地方E連盟代表者懇談会では今後の日本大会開催についてが中心となり意見交換が行われました。昨年の大会ではかなり重苦しいムードの中でこの問題を話し合いましたが、今年をみる限りでは将来的には明るい展望となりそうです。来年は無理でも5年後・10年後ならそれを目標として、人材の養成・大会への参加・地域への貢献が可能となりそうです。93年大会は大本(京都)で招集する用意があり、92年大会が決まればもっとよかったです...

大会期間中何人もの人に、「札幌ではお世話になりました。」と声を掛けられました。大変申し訳無いのですが、ほとんどの人は覚えていないのです。2年前、ただ大会が失敗しないようそれだけを祈り・考えていたので全く余裕が無かったのです。横浜ES会の5年に一度の割に日本大会を開催するということは奇跡に近いことであり、どんどん世代を更新させてゆく力が無ければ不可能なことです。今年の大会が5年後への一歩となり、今年「お手伝い」の人が5年後は指図する人へと変わるのが見えるようです。事務処理を機械化によりかなり簡素化し、その分今大会のテーマであった「ふれあい」をたくさん感じる事ができ大成功の大会でした。(BE)

事務局 日報

委員会

90-09-29 16:30-18:00 苫小牧公民館  
出席者 児玉 星田 カワハラ 馬場 阿部 岩井 横島 須藤 渡辺  
カワハラ氏は編集の任を過ぎ、馬場氏が担当に当る。

北海道大会

90-09-29 15:00-前夜行事 サイクリングセンター  
90-09-30 10:00- 苫小牧公民館

90-10-04 HEROLDO への記事掲載依頼  
依頼人 宇573 枚方市 山之上 5-37-31-15 堀田裕彦 氏  
内容 PC-9801 シリーズとその互換機で、半角文字(半角)を表示するソフト「FOX」を開発した。PC-VAN・エスペラントSIGで無料配布中。フロッピーも実費配布する(1000円)。配布媒体、3.5 インチ FD (2HD)。問い合わせ、上記。密着口座:大阪7-306280。名義:堀田裕彦 PC-VAN:GXDT1821

90-10-12 HEL会員、成田敏彦氏へのHEROLDO、転居先不明につき返送。

90-10-13 熊本E会宛HEROLDO、宛先なしにて返送。

90-10-13 住居移転通知  
三石 清:〒454 名古屋市中川区春田2丁目32番地 (HEL会員) 春田荘 1-704 TEL 052-431-5794

90-10-19 沼津E会より、沼津E会とPC-VANエスペラントSIG「エスペラントの広場」パンフ「地球語エスペラント」の内容確認の依頼。同月21日、遺の活動内容を報告。

90-10-20 LA MOYADO N-ro 476. okt.1990 著  
内容:フリスカの報告、集

90-10-24 エスペラントの世界 1990-10 著  
関連記事:北島環「海外誌による海外の動き」

90-11-02 VERDA MONIETO N-ro 61. oktobro 著  
(和歌山 隔月刊)  
記事:12月8日、於 県民文化会館、催 ザメンホフ祭

90-11-05 PONTEITO N-ro 120. 1990.11.01 著  
関連記事:三沢正博、投稿文

90-11-14 パンフ「地球語エスペラント」の訂正事項の問い合わせ

90-11-19 会計何部より会費納入通知  
90-91 年分、札幌市 山口紀代美。同年分、市川市 高橋達治。

90-11-24 Mejlsteno N-ro 100. okt.1990 100号記念号 著

90-11-24 Mejlsteno N-ro 101. nov.1990 著  
記事:12月9日、於 学習塾「公文」長町教室、催 ザメンホフ祭

90-11-24 La Movado N-ro 477. nov.1990 著  
関連記事:第54回道大会の記事(星田 記)

90-11-27 会計何部より道大会不在参加者通知  
仙台市、松本富氏

90-11-29 沼津エスペラント会より、パンフ「地球語エスペラント」(1990.11月 実用版)の紹介、公開方法。  
1. 62円切手2枚により1部送付  
2. MS-DOS、新松文書ファイル、一太郎V3文書ファイルなどパソコン編集の形態で公開。  
a. パソコン通信PC-VAN エスペラント SIGのフォーラム(インフォモ、ニフティ、サーブFL)エスペラント会議室上に掲示。ダウンロード自由。  
b. Fディスク(5インチ2HD)送料実費62円切手×10枚 54円2DD、3. 54円FD は相談に応じて。  
3. 地域のエスペラントを載せたパンフ希望の場合は、62円切手×10枚にて作可。

講習会のお知らせ

(札幌)

札幌ES会

★毎週土曜日1時30分から4時30分まで  
1:30-3:00 テキストによる講習(講師 高橋)  
3:00-4:30 会話中心(講師 木村)

札幌市職員会館

連絡先 坂本 電話011-611-5059

★月2回 平日午後から (日時については不定期)

講師 木村、高橋

札幌市職員会館

連絡先 渡辺 電話01232-2-3601

SATグループ

★毎週土曜日7時から9時まで

講師 講習終了者

テキストによる講習

宮沢自宅

連絡先 渡辺 電話011-717-4189

月1度会話中心の会あり

カルロ学習会

連絡先 宮岸 電話011-582-3122

# SALATO

★札幌のザメンホフ祭は12月15日(土)。出席の申し込みは40名をこえた。会場に入り切れない、どうしよう、と世話人。出欠返答ハガキから札幌エスペラント会会員の声のいくつかを紹介する。

☆『いつもお世話になります。転居いたしました。名簿の住所変更をお願いします』(小淵修子)。

《小淵さんの新住所は〒004 札幌市厚別区厚別中央2条4丁目15番2-1203です》

☆『ザメンホフ祭の幹事、すっかり馬場さんに定着しましたね。“ごくろう様”と心より申し上げます。バザー・募金が昨年より少しでも多くなればと思っております』(末永章子)。

☆『今年も出席できず残念です。エスペラントとは今年もまた、ほとんど縁なく過ごしてしまった1年でしたが、下の子も少しづつ手を離れてきたのでまた勉強したいと思っていますところ。この夏、親があんなにも行きたかったポーランドへ長女が行ってきました』(留目雅幸・昌子)。

☆『いつも御案内有難うございます。12月は仕事も家事も忙しくて残念です。楽しい会になりますように!!』(白馬友子)。

☆ Kara Emiko,  
Kiel vi fartas? Mi fartas bone.

## 連盟会費のご案内

希望者はどなたでも入会できます。

会費年額2000円(91年1-12月分、本誌購読料を含む)をお納めの方には当該期間の本誌をお送りします。また会員は連盟の各種サービス(学習相談、文通紹介、行事案内など)を受けられます。

ご送金は右の郵便振替口座へ

Mi ne povos partopreni la feston, ĉar mi devos okupiĝi por mia familio. Pardonon, ke mi sendas poŝtkarton al vi malfrue. Mi deziras, ke la festo en la 15a decembro sukcesos.  
(Yumiko HORI)

☆ Bedaŭrinde mi ne povos ĉeesti la feston de Zamenhof ĉi-jere. Mi esperas, ke ĝi estu sukcesa kunveno.  
(Masami Jošimura)

## — 広 告 —

一年の計は元旦にあり——

元旦からラ・モバードを読もう!

La Movado は北海道のエスペラント運動を応援しています! 毎号、北海道発のニュース掲載。今すぐ申し込みを!

月刊 年間購読料3200円

〒振替 大阪 6-60436 ラ・モバード社

ラ・モバード苫小牧分局

★仕事の分担を減らしてもらいました。ほっとしています。もっとも、編集部員であることにはかわりないので、きちんと仕事したうえで、いいことはきちんと言います。(KK)

★今号から私が編集長です。力不足は本人が一番知っています。ですから批判を下さい。書き手と読み手がことばを投げ合うような誌面が出来れば最高です。“エスペラント人口が減少している、暗い”……そんなことは北海道には似合わないようです。よいお年を。(馬場)

★ Heroldo de HEL

第37号 (1990, decembro)

北海道エスペラント連盟機関誌 年6回

編集部: 001 札幌市北区新琴似7-8-5-34

馬場恵美子気付 ☎011-761-8060

郵便振替口座: 小 樽 0-17075

北海道エスペラント連盟